

学士課程教育における自己点検とその改善に関する年次報告書（総評）

総合科学部

1. 評価結果一覧

自己点検・評価単位	分析 項目 1-1-1	分析 項目 2-1-1	分析 項目 2-1-2	分析 項目 2-2-1	分析 項目 2-2-2	分析 項目 3-1-1	分析 項目 4-1-1	分析 項目 4-2-1	分析 項目 4-2-2	分析 項目 5-1-1	分析 項目 5-1-2	分析 項目 5-2-1
学部	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	—	⑤	—	—	⑤
総合科学 プログラム	—	—	—	—	—	—	—	⑤	—	⑤	⑤	—
国際共創 プログラム	—	—	—	—	—	—	—	⑤	—	⑤	⑤	—

自己点検・評価単位	分析 項目 6-1-1	分析 項目 6-2-1	分析 項目 6-3-1	分析 項目 6-3-2	分析 項目 6-3-3	分析 項目 6-4-1	分析 項目 6-4-2	分析 項目 6-4-3	分析 項目 6-5-1	分析 項目 6-6-1	分析 項目 6-6-2	分析 項目 6-6-3
学部	⑤	—	⑤	⑤	—	⑤	⑤	④	—	—	—	⑤
総合科学 プログラム	—	⑤	—	—	⑤	—	—	—	⑤	⑤	⑤	—
国際共創 プログラム	—	⑤	—	—	⑤	—	—	—	⑤	⑤	⑤	—

自己点検・評価単位	分析 項目 6-6-4	分析 項目 6-6-5	分析 項目 7-1-1	分析 項目 7-1-2	分析 項目 8-1-1	分析 項目 8-1-2
学部	④	—	⑤	—	⑤	⑤
総合科学 プログラム	—	⑤	—	⑤	—	—
国際共創 プログラム	—	⑤	—	⑤	—	—

(⑤十分に適合する ④適合する ③やや適合する ②余り適合しない ①適合しない)

2. 評価結果に対する総評

【総合科学部】

本学部は、平成 30 年度から入学定員 120 名の総合科学科 (Department of Integrated Arts and Sciences : IAS) に加え、入学定員 40 名の国際共創学科 (Department of Integrated Global Studies : IGS) を設置し、1 学部 2 学科体制となった。評価結果一覧に示すように、評価基準については、IAS、IGS ともに「十分に適合する」という評価となっている。

【総合科学プログラム】

総合科学プログラムでは、各々4つの授業科目群からなる3つの探究領域(人間, 自然, 社会)を設け、学生は2年次生からいずれかの探究領域に所属する。各探究領域内のいずれかの授業科目群を主たる授業科目群として履修しつつ、探究領域内あるいは他探究領域の関連科目を履修できる。また、総合科学的思考の基礎力を育成するための必修科目として1年次前期に「総合科学へのいざない」、1年次後期に「総合科学概論」を開講している他、2年次以降には学際科目や専門外国語科目が履修でき、総合科学の進化と専門性の追求を両立する履修制度を採用している。また、令和元年度からは国際共創プログラムとの共修となる総合科学部共通科目の履修も始まった。このような履修制度を実効性あるものにするために、学生10~11名に対して1名のチューターを配置し、履修指導を行っている。各チューターから提供された学生指導に関する情報は学部教務委員会内に設置された領域別履修指導会議が把握し、適切な履修指導に役立てている。こうした履修指導を含め総合科学部における様々な活動(学生生活指導, 留学支援, オープンキャンパス, 高校模擬授業, 高校生大学訪問, 就職活動支援, 教育実習支援等)については、委員長(副学部長(学士課程教育担当))及び各探究領域4名の委員12名からなる学部教務委員会が統括して対処している。令和6年度には総合科学プログラムとして9回目の特別研究指導も実施された。また、3年次後期から卒業研究にとりかかることのできる仮配属の制度を多くの学生が利用しており、卒業研究や就職活動に柔軟に対応し、質の高い特別研究論文を作成し、かつ各学生の満足いく就職活動ができる仕組みを取り入れている。

以上の観点から、総合科学プログラムは各評価基準に「十分適合する」と評価できる。

【国際共創プログラム】

平成 30 年度に新設された国際共創プログラムでは、国際社会の抱える諸課題を理解し、新しい方向性を考えるために、環境、災害や資源などに関する自然科学の知識を修得するとともに、文化や宗教、社会的仕組みなどに関わる人文社会科学の視点を理解することを目指し、「文化と観光」、「平和とコミュニケーション」、「環境と社会」の3つの視点について学ぶ。また、世界中から集まった学生が分かり合うために、授業はすべて英語で行う。英語能力は、異文化を理解するため、他者とコミュニケーションするための第一歩であり、英語の文献を読んで理解すること、海外の研究者、技術者と英語で討論できることは、もはや必須の能力となっている。「英語を学ぶ」だけでなく、「英語で学ぶ」、「英語で話し合う」ことを通して、コミュニケーションの道具としての英語教育を重視する。令和元年度からは総合

科学プログラムとの共修となる総合科学部共通科目、国際共創コア科目や国際共創科目の履修が始まった。2年次後期には日本人学生にとって必須である半年間の海外留学も実施し、令和6年度は、36名が留学した。

また、総合科学プログラム同様、学生13～14名に対して1名のチューターを配置し、半期に1度チューター面談で履修指導を行っている。また、そこで得られた学生指導に関する情報は、チューターを中心に構成されている国際共創学科教務委員会が把握し、適切な履修指導に役立てている。また、総合科学科と合議が必要な事項について国際共創学科教務委員会委員長が学部教務委員会に出席して情報共有し、学部教務委員会委員長（副学部長（学士課程教育担当））のもと、両学科に共通する問題について対応している。

以上の観点から、国際共創プログラムは該当各評価基準に「十分適合する」と評価できる。